

このたびの東日本大震災により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の皆様に謹んでお見舞い申し上げます。
一日も早い復旧復興を心よりお祈り申し上げます。

流行のつぼ

古くから日本人の生活になじんできたろうそく。亀山市川崎町のろうそく製造業、アシベ工芸の「復興祈願ろうそく」が、注目を集めつつある。従業員三十人の町工場に訪れた転換点は、東日本大震災だった。(久野賢太郎)

「震災の翌日から、矢継ぎ早に非常用ろうそくの注文が集まった」。その振り返るのは、同社の新庄哲三社長(63)だ。従来は寺社や葬祭業者など、業務用を中心にろうそくや線香を製造していた同社だが、関東地方で

アシベ工芸のろうそく



高野山の寺などに置かれている復興祈願ろうそく(右)などの和ろうそく(左)も亀山市川崎町のアシベ工芸で



急ピッチで生産される非常用ろうそく

復興祈願 道筋照らす

計画停電が始まると、あつぽが全国から舞い込む中、が、小さな会社の良いところ。新庄社長は胸を張る。フル操業での生産 新庄社長は、寺や神社をともす。売り上げの10%は震災から二カ月半後。部は、同社と寺から東北の六月だった。これまでに贈られる仕組みだ。「心も二酸化炭素(CO2)排出量が、祈願ろうそくの生産原因が災害となると事情 以前から取引のあった真拝客の関心を集め、支援アイテム商品などを開発し、も続ける。新庄社長は、葬は異なる。降って湧いた 言宗の総本山、高野山金の輪は関西地方の寺院へ てきた同社が、今回も新式や仏壇のろうそくは、広がりつつある。商品を生産スピード開発し 亡くなった人の足元を照らす明かりや、子孫が暮らす家の目印という意味がある。復興祈願ろうそくには、日本の復興への道筋を照らしてほしいという意味も込めた」と拳を握りしめた。